

4.9 一人一人の理解と適切な支援方策検討のための ICF 及び ICF-CY の活用—寄宿舎での取り組みを中心に—

静岡県立中央特別支援学校 主任寄宿舎指導員 川口ときわ
教 諭（平成 21 年度本研究所研究研修員）小林幸子

1. ICF 及び ICF-CY を活用した背景と目的

静岡県立中央特別支援学校（以下、本校）の寄宿舎では、実践指導を通して個々の実態に応じた生活技術の獲得と自立にむけた生活力の育成を図ることを目指しています。

生徒の実態が多様化している中で、個々の生活における特徴を捉えた指導が必要になっています。また、一人一人が目指す自立のあり方も多様化し、個々のニーズに応じた自立に向けた生活指導が求められています。したがって、生活の実践の場である寄宿舎で指導にあたる寄宿舎指導員には、一人一人の生活を幅広く捉え、個々に応じた生活技術や生活の工夫を見いだす支援の力が要求されていると考えられますが、現在や将来の生活観についての指導員間や関係職種との共通理解の弱さ等の課題も見受けられました。

ICF 及び ICF-CY（以下、ICF/ICF-CY）は生徒の生活を包括的に捉えていくことのできる概念の枠組みであり、生活を広く網羅した分類項目を含むものです。ICF/ICF-CY の活用によって生徒の生活を心身機能・身体構造だけでなく、活動や参加、そして環境をも含めた広い視点で見ることができます。そこからさらに、生徒自身が獲得すべき技術を見だし、それに対する指導を導きだすことができ、卒業後のそれぞれの自立のあり方を実現するための、社会的アプローチの方策をも見つけ出すことができると考えられます。生活全般を支援していく寄宿舎においては、ICF/ICF-CY の概念に基づいて指導計画を立てることは非常に有効であると考えられます。

そこで、本稿では、本校寄宿舎で取り組んできた ICF/ICF-CY の概念の枠組み及び分類項目を活用して、一人一人の生徒を捉え、そこから適切な支援の方策を探る取り組みについて述べたいと思います。

2. ICF/ICF-CY の活用の実際

(1) ICF 関連図及びコードセットの検討

ICF/ICF-CY の概念の枠組みに基づいて生徒を捉えることを具体化するには、そのためのツールが必要です。本校寄宿舎では ICF/ICF-CY の考え方に関する理解を進めながら、ICF/ICF-CY を支援に活用するツールとして ICF 関連図を導入し、本校寄宿舎独自の関連図を作成しました（図参照）。

<健康状態>変調または病気 脳性麻痺		対象者: Aさん 18 才 女 ICF関連図作成日: 年 月 日		
<心身機能・身体構造> b7353(×)下半身の緊張 s750(×)下肢の構造	ステージ 1 <活動>寄宿舎での実行状況 d5404(△・○)衣類の選択 d570(△・○)健康管理 d640(△・○)調理以外の家事 d4608(○・○)様々な場所での移動 単独帰省完了 d465(○・○)車椅子での移動 d710(○・○)基本的な人間関係	<参加>現在の参加状況 d820(△・○) 学校生活 d910(△・△) コミュニティライフ d920(△・△) レクリエーション・レジャー	ステージ 2 <活動>期待される活動 【家庭生活(独り暮らし)】 d5404 衣類の選択 d570 健康管理 d630 調理 d640 家事 d650 家庭用品の管理 d6504 福祉用品の手入れ d4608 様々な場所での移動 d465 車椅子での移動	<参加>期待される参加 【大学入学とともに独り暮らしをはじめめる】 d610 住居の入手 d620 サービスと物品の入手 d830 高等教育 d910 コミュニティライフ d9205 社交 【地域】 d730 知らない人との人間関係 d740 公的な人間関係 d750 友人、同僚との人間関係 d770 恋愛、婚姻関係 d860 基本的な経済取引 d9205 社交(サークルなど)
	<環境因子>物的・人的・制度的環境 e1150(↓)一般的な用具 →使いやすい工夫 e1151(↑) 福祉用具 e120(↑↓)車椅子 生活領域の拡大により↑↓あり e320(↑↓)友人 e325(↑)知人・仲間 e340(↑)ボランティア ヘルパー d575(↑)支援のサービス e580(↑)保健サービス e585(↑)教育と訓練の制度サービス (↑…促進因子、↓…阻害因子)	<個人因子>体力、習慣、経験、性格困難への対処方法など ・日課をこなすことに精一杯で、ゆとりある生活をするのが難しい。 ・真面目ではあるが、思考の柔軟性に欠ける。 ・人と接することが好きで、会話を楽しむことができる。 ・後輩の面倒見は良い。		<主体・主観>本人の気持ちなど ・将来的には福祉分野で人と関わる仕事をしたい。 ・卒業後の独り暮らしには大きな不安を抱いている。

図 ICF 関連図

ICF 関連図の作成作業では、ICF-CY の分類項目を活用しています。しかし、アセスメント段階でその全ての分類項目を最初から評価していくことは難しく、使いやすくすることが求められたため、寄宿舎として必要な項目を抜粋してコンパクトにすることにし、「中央特別支援学校寄宿舎コードセット」として作成しました。コードセットは、指導の場を寄宿舎に限定した場合に必要とされる分類項目を、ICF 関連図を作成した中で選択されることが多かった項目、在舎する生徒全体の実態から使用されるであろうと予想されるコードを研修担当が選択し、ICF-CY の第 2 レベル (3 桁) だけでは足りないと思われる項目は第 3 レベル (4 桁) までの分類項目、ICF-CY から必要とされる分類項目を選択しました。コードセットの順序については、寄宿舎において指導の頻度の高い章から並べ変えています。

評価については、数値による細かな評価ではなく、簡便な記号「○・△・×」を用いて、能力 (○ 困難なし・△多少困難あり・×困難あり) と実行状況 (○介助ありで実行している・△一部介助ありで実行・×実行していない) それぞれについて行いました。

(2) 関連図の具体的な活用

①指導計画を立てる際の活用

本校寄宿舎では、ICF 関連図を作成することによって、生徒の実態を細かく分析し、そこから指導すべき課題を見つけて指導の計画を立てることを目指してきました。

ICF 関連図作成の具体的な手順は以下のように行いました。

1) ステージ 2 (将来望まれる参加状況) において、個々の生徒が目指す将来的な「参加」の

形を考える。

- 2) 目指す「参加」に向けて、望まれる活動を考える。
- 3) ステージ1（寄宿舎を中心とした現在の参加状況）において、現在の生活における「参加」の状況を見る。寄宿舎での生活を中心に考えるが、ステージ2の「参加」のために家庭での状況を知る必要があれば、土日・休日の生活も見る。
- 4) 現在の生活の中での「参加」にかかわる「活動」を見る。
- 5) 作成したICF関連図を資料としてケース会を持ち、個々の課題にむけた指導計画を作成する。

事例（図）の生徒の場合、ステージ1の寄宿舎における日常生活については、大きな課題もなく「参加」が実現できています。しかし、卒業後、大学に進学し、一人暮らしを始めるという「参加」を実現させるためには、現在の「活動」「参加」の実行状況では次のようなことが課題となることが想定されます。「現在の『介助あり』で実現している実行状況を卒業後どうしていくのか。」「現在の『参加』を実現させている環境因子（車椅子、医療、寄宿舎指導員、母親など）をどう置き換えていくのか」、さらに、「一人で生活することによってどんな新たな課題が生まれるのか（一人暮らしの家事、健康管理など）」があります。

このように、ICF関連図による指導計画検討の結果、卒業までに寄宿舎で指導するところは、健康管理（腰痛に対する身体のケア等）、一人暮らしをするために必要な家事、必要な福祉制度についての知識等ということが明らかになりました。

②ケース会資料としての活用

年度当初に作成したICF関連図は、寄宿舎指導員同士のケース会や担任（教員）とのケース会などで共通理解を図るためのツールとしても用いています。一つの生徒の実態を言葉だけで表現すると、それぞれの指導場面や関わり手の視点の違いによって表現のばらつきが生じ、共通理解を図るのに時間を要してしまいがちです。しかし、分類項目が記入されたICF関連図をケース会の資料として用いることで、共通理解の促進や話し合いの時間の短縮化が可能になるのではないかと考えられ、活用を試みてきました。まさしくICF/ICF-CYが有する共通言語としての性格が生かされたものではないかと思っています。

例えば、担任と保護者と連携して帰省訓練の計画をする時、寄宿舎で作成したICF関連図をもとにケース会を実施しました。そこで、生徒が帰省する際の課題を分析し、教室（お金の計算）・寄宿舎（タクシーの手配、帰省経路の確認）・家庭（見届け、地元駅での迎え）それぞれがどのような指導を担っていくかを確認しあい、連携した指導を行うようにしました。このことによって、一つの課題に対して、お互いに新しい気づきが得られ、より連携が取りやすくなりました。実際の帰省においては、教室、寄宿舎、家庭がそれぞれの立場から働きかけることで生徒が意欲的になり、「一人で家に帰る」という目標をきちんと意識して訓練を行うことができるようになりました。

③入舎前のアセスメントでの活用

本校では、入舎を希望する生徒に対して「生活実態調査」を行っています。その時にICF関連図を使った実態把握を行っています。入舎後の指導計画を立てる時に使用するものとは異なる形式（ステージを分けていない形式）のICF関連図を用い、セルフケア、移動、コミュニケーション

ョンを中心に評価し、分類項目を使わずに記しています。環境因子については保護者面談の中で把握できることを表記しています。この時作成された ICF 関連図を使用して入舎後に指導計画を作成できるようにしています。このことによって、入舎前の実態を表す表記が簡潔になり、個々の実態をわかりやすく紙面に表すことができるようになりました。

3. まとめと今後の展望

(1) 取り組みの成果と課題

これらの取り組みを通して、寄宿舎指導員の生徒を捉える視点が徐々に広がっていきました。特に「参加」については、これまで現在の生活のみにとらわれていた視点が、卒業後を見通す視点に変わり、新たな「参加」が見えるようになってきました。こうした視点の広がりから、これまで見出せなかった支援を導き出せるようになり、支援の幅が拡大していきました。

また、「参加」を実現させるための「活動」を細かく分析することで、生徒のつまづきがどこにあるのかをより明確にすることができるようになってきました。一つの「参加」を ICF/ICF-CY の観点から分析することによって、生徒自身の力を伸ばすための指導をるところと環境因子を整えるべきところを明らかにすることができるようになり、指導計画を立てるときの焦点を明確にできるようになってきています。

例えば、「一人で帰省する」という「参加」を実現しようとするとき、その「活動」は「バスに乗る」「電車に乗る」「切符を買う」「車椅子の操作」「お金の計算」「知らない人とのコミュニケーション」など、多くの「活動」や「参加」が課題として想定されます。それらを ICF 関連図等のツールを使って検討することで、帰省訓練をする際の観点や課題がわかりやすくなります。

一方で、人事異動によって寄宿舎指導員の入れ替わりがあることで、ICF/ICF-CY の考え方や活用方法を継承することが難しい状況もあります。ICF の考え方に基づいたコードセットや ICF 関連図等のツールを活用してきましたが、新しい職員にもより分かり易く、使いやすいツールや活用マニュアルが求められていると考えられます。

(2) 学校全体での取り組みへの広がり

寄宿舎での活用だけでなく、より生徒の様子が見える ICF 関連図を作成・活用することを通して、学級担任、保護者、医療機関等との連携のためのツールとし ICF/ICF-CY を用いる取り組みを検討しています。

寄宿舎における指導は学級担任と連携して行われなければなりません。生徒の課題に対し、寄宿舎と教室がそれぞれに担う指導を確認し、明確にすることによってより効果的な指導ができると思います。その際、ICF/ICF-CY が共通言語としての特徴が活用できると考えています。

これまで、本校では寄宿舎においてのみ ICF/ICF-CY を活用した取り組みを行ってきましたが、平成 19 年度から、ICF/ICF-CY に関する研修会は学校全体に呼びかけて年に 1 回程度実施してきました。毎回多くの教員が希望していることから、ICF/ICF-CY を活用した取り組みに関心がある教員は多いのではないかと考えられます。研修会終了後、「具体的な ICF/ICF-CY の活用方法が知りたい」という要望もあり、ICF 関連図の作成に関する自主学習会も実施されるなど、学校全体での取り組みにつながる流れが見られ始めています。

今後、学校全体としての取り組みが進められ、寄宿舎と教室との連携だけでなく、生徒を中心として学部間、保護者、医療機関等との連携に関しても共通言語として ICF/ICF-CY が活用されることが期待されます。

(3) 今後に向けて

新たな取り組みとして、「生徒自身による ICF/ICF-CY 活用の試み」を行っています。

本校で入舎している生徒はほとんどが高等部在籍であり、卒業後の自立に向けた生活技術の獲得と生活力の向上を入舎目的としています。その中で、大学進学や一般就労を希望し、卒業後の一人暮らしを目指している生徒もいます。家庭を離れて一人で暮らすとき、寄宿舎生活とは違った生活の工夫や技術が必要となります。

しかし、多くの生徒は自分の障害に対する認識が弱く、どこをどう工夫することが生活をしやすいにするのかということを考えることが難しいのが現状です。自分のできること、できないことを知り、自分にとって必要な介助を知ることは一人で生活していくために必要なことです。そこで、卒業後の「参加」として、ICF/ICF-CY の視点から自己を見つめ、現状の課題を職員とともに見つけることを目的とした取り組みを行っています。そのことを通して、自己を知り、自分なりの「参加」のあり方を見つけることで、社会参加の幅を広げることができればよいと考えています。

生活技術の向上、獲得を目指す寄宿舎での指導においては、生活を幅広く捉える視点が強く求められます。生活を包括的に捉えていく ICF/ICF-CY の考え方は、まさに寄宿舎指導員に求められる視点です。今後も ICF/ICF-CY の考え方を寄宿舎における指導に生かすための方策を模索し、一人一人のニーズに応じた自立を目指した指導を行っていきたいと考えています。